

2021年度教育研究活動報告用紙(様式9)

氏名 小田日出子	職名 教授	学位 修士(法律学)(九州国際大学 1998年)
----------	-------	--------------------------

研究分野	研究内容のキーワード
基礎看護学, 基礎看護技術 社会人基礎力の育成・向上	看護技術教育, 社会人基礎力, 主体的学習

研究課題
看護技術教育に関する研究 大学生の社会人基礎力の向上と主体性の育成に関する研究

担当授業科目
フィジカルアセスメント技術演習(1年後期) 生活援助技術論演習(1年後期) 看護過程論(2年前期) 看護キャリア形成論(2年前期) 基礎看護学実習Ⅰ(1年後期), 基礎看護学実習Ⅱ(2年前期・後期) 看護総合演習(4年前期・後期) 看護総合実習(4年前期)

授業を行う上で工夫した事項(※ 助手については、実習・演習等の指導を行う上で工夫した事項)
<p>授業科目名【看護過程論】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昨年度に引き続きコロナ禍ではあったが、今年度は、2年次生104名を対象に、授業は全て「対面」で、6～7名の学生からなるグループワークおよびグループ学習活動の進捗に合わせた全体講義の組み合わせによる授業(100分×28回 2単位)として実施した。 ・昨年度同様、本授業の概要、流れを把握するために必要な情報(学習目標、授業内容及び授業進行など)は、Google Classroomの「ストリーム」を利用し、受講生全員に事前に配信した。また、毎回の授業に必要な資料(授業スライド、参考・補足資料、課題など)についても、Google Classroom「授業」の「トピック」毎に事前に提示し、「予習」など、学生が余裕をもって授業準備を整えられるよう配慮した。 ・授業資料や取り組むべき課題を事前に提示することで、学生には「看護過程」を学ぶことや看護師に必要な基本的思考＝問題解決思考のプロセスを理解・修得する過程を「面白い」と感じ、自主的・主体的に学習に取り組む姿勢を身につけてもらうこと、また、「予習」も含め、学生個々の学習レディネスが高まることを目指した。 ・授業は、学生のグループ学習活動の進捗に合わせて全体講義を組み入れる形で構成した。従って、毎回の授業終了後には担当教員間でMeetingを開き、各グループの学習活動の進捗状況やグループ内学生の理解度、グループワークを進めるにあたっての課題の有無など、教員間の情報交換と情報共有に努めた。 ・今年度、基礎看護学分野を担当する教員は、教授2名、講師1名、助教1名の4名および助手1名の計5名で、講師、助教の2名が欠員のままである。この体制で演習(グループ学習活動)を軸とする授業を進めなければならなかったため、外部講師1名に応援を求めた。 ・グループ学習活動への支援は、基礎看護学分野の教員4名+外部講師1名の計5名を中心に行った。教授、講師、助教、外部講師の4名が学生6～7名のグループを3グループずつ担当した。科目責任者については、助手1名との2人体制で、4グループを担当、助手とともに各グループのチューター役割を果たした。

- ・グループワーク時の振り返りには独自に作成した観点別評価シートを用い、学生自らが所属するグループの学習活動を客観視するとともに、グループとしての目標達成状況を確認できるようにした。振り返りの結果は全体で共有し、他との違いを意識させることでグループ学習活動の充実と活性化を図った。
- ・各グループの学習成果の披露と学びの共有を目的に、それぞれが導き出した看護技術を発表・実践・評価する場を設けた。各グループ、アセスメントにより導き出した看護技術の実践に意欲的に取り組み、パフォーマンス後の意見交換会は、学生間の活発かつ積極的な意見交換の機会となっていた。
- ・当該科目の最終評価は、筆記試験・小テスト(60%)、個人学習・レポート(20%)、学習成果発表(10%)、学習貢献度(10%)による総合評価とした。

最終評価としてのクラス平均は78.6±6.61(81.4)点(最高93(93)点、最低68(61)点)で再試験当者はなかった。最終成績の内訳は、秀5(6)名、優42(56)名、良45(27)名、可11(2)名で、科目履修登録していた受講生104名(再履修者5名を含む)のうち、学期途中からの長期欠席による受験失格、その後、休学した学生1名を除く103名が、2021年度当該科目の履修を修了した(※文中()内は前年度の人数)。

授業科目名【 看護キャリア形成論 】

- ・2年次生104名を対象に、今年度も、全て「遠隔」での授業(100分×7回1単位)として実施した。
- ・昨年度と同じく、授業はGoogle Meetでの全体講義、個人ワークおよびClassroom内に設定したブレイクアウトルームを利用したリモート・グループワーク、また先輩OGによるリモート・パネルディスカッション等により構成した。
- ・授業に必要な情報(授業概要、授業進行等)は、Google Classroomの「ストリーム」を利用して、事前に受講生全員に配信した。特に「評価」については、予め、学習ポートフォリオの作成・提出を求めること、科目の特性から筆記試験は行わず、課題レポート、学修ポートフォリオ、発表、学習参加度/貢献度等を総じて評価対象とすることを具体的かつ丁寧に説明した。
- ・特定のテキストは使用せず、毎回の授業に必要な資料(講義資料、各種ワークシート、課題など)は、全て独自に作成したものを使用した。資料類は対面授業時よりも数日早く、Google Classroomの「トピック」毎に事前にアップロードし、印刷等、学生が余裕をもって授業準備を整えられるよう配慮した。
- ・講義は助教との2人体制で臨んだ。授業中、同席の助教には、チャットを利用して、①学生の入退室状況の確認、②講義内容の要点整理、③学生の質問への回答、④問い合わせへの応答、⑤強制退出等、遠隔授業中のトラブル対応等を依頼し、円滑な授業進行に努めた。
- ・授業では、①“キャリア形成”に関する知識・理論を概説し、看護職としての自身の未来を考える“きっかけ”づくりの場となるように、②学生の自己理解を促し、③職業理解を深めさせ、さらに④キャリア選択に係る意思決定を促し、現時点での⑤看護キャリアプランの作成を支援した。
- ・授業中、受講生には必要時以外「マイクOff、カメラON」を指示、PCの画面越しではあったが、講義の合間に個人ワークやグループワークを取り入れ、可能な限り双方向での参加型学習となるよう、場づくりを工夫した。
- ・グループワークは、学生6~7名を配したブレイクアウトルーム16室を設定し、折々に学生間のディスカッションを取り入れていった。教員は、随時、各部屋を訪問しつつ全体をファシリテートしていった。
- ・看護キャリア形成、キャリアアップの実際例として、授業4回目に本学看護学科OG4名(助産師、本学看護学科教員、小学校養護教諭、海外で看護師養成支援事業を主催)を外務講師として招聘し、昨年度に引き続き、Google Meetでの「リモート・パネルディスカッション」を企画・実施した。受講生の興味・関心は極めて高く、積極的に質問する学生も多く見られ、盛会であった。次年度も、様々な場で看護専門職としてのライセンスを活かしつつ社会貢献している看護学科OGを招聘し、学生個々に自らのキャリアビジョンを明確化する“きっかけづくり”の場として、本企画を継続・実施したいと考えている。
- ・当該科目の達成度評価は、学習成果としての課題レポート(50%)、発表(口頭、プレゼンテーション:10%)、レポート外の提出物(20%)および「その他」として、日ごろの遠隔授業への取り組み(積極的・主体的学習姿勢・態度、Meet Meetingへの参加度/貢献度、出席状況など:20%)により総合的に評価を行った。

総合評価の結果は、クラス平均が78.6±7.93点(最高100点、最低63点)で、成績分布の内訳は、標準レベル以上の学生が96/104名92.3%、このうち理想レベルに達した者は43/96名、44.8%であった。努力を要する「可」レベルの者は8/104名7.8%と昨年(0名)より多かったが、「不可」はいなかった。最終評価の内訳は、秀8名、優35名、良53名、可8名で、104名全員が当該科目の履修を修了した。

授業科目名【 生活援助技術論演習 】

- ・ 1 年次生 99 名を対象に、後期 COVID-19 感染拡大防止策を講じつつ、対面授業(100 分×42 回 3 単位)を実施した。
- ・ COVID-19 感染拡大防止策として、講義は一斉に、技術演習は学生を 2 班に分け、①技術演習／②課題学習の組み合わせで 3 コマの授業を 2 分割し、班毎に入れ替える形で行った。これに伴い、基礎看護学分野を担当する教員 6 名も、①技術指導 5 名、②課題学習支援 1 名と役割を分担し、全員体制で授業に臨んだ。
- ・ 昨年度まで、自身も「食事援助技術」の講義・演習合せて 6 コマ (12 時間) を担当してきたが、今年度について、試みとして講師および助教の 2 名を主たる科目担当者として单元毎に 2 名のいずれかが主担当となって授業を展開する方法に変更し、自らは、前述②課題学習中の学生支援を役割とし、後方支援に徹した。コロナ禍の影響により、特に技術演習時間を短縮せざるをえない状況での学修を促進するには、学生一特に初学者一に求める課題学習の場を、基礎的知識と技術の統合に向けた意図的な働きかけの機会として、効果的に活用する必要があると考えたからである。
- ・ 課題学習を支援するにあたっては、教員に「正解」を求めたがる学生の態度・行動特性を念頭に、敢えて「何が気になりか」、「なぜ気になるのか」、「なぜそう思うのか」「自身の考えはどうか」など、さまざまに「問い」を発するなかで、学生を立ち止まらせ、考えさせ、気づかせ、発見させること、結果として、学生自らの思考の末に「答え」を導き出すことができるように、意図的に働きかけることを心がけつつ関わった。
- ・ 当該科目の達成度評価は、筆記試験(65%)、ポートフォリオ(15%)およびその他(20%) (課題レポート(15%) + 学習貢献度(5%))により総合的に評価した。

総合的に評価を行った結果、クラス平均は 72.9±9.0 (68.7±9.21) 点(最高 87 点, 最低 32 点)で、全体として標準レベルに達していた。成績分布の内訳は、標準レベル以上の学生が 66/99 名 66.7%、このうち理想レベルに達した者は 21/66 名、31.8%であった。努力を要する「可」レベルの者は 24/99 名 24.2%、「不可」は 9/99 名 9.1%いた。「不可」となった 9 名については再試験を実施し、7 名は再試合格で「可」に、残り 2 名は不合格で「不可」となった。最終成績の内訳は、秀 0 名、優 21 名、良 45 名、可 31 名、不可 2 名で、受講生 99 名中 97 名が当該科目の履修を修了、2 名が次年度再履修となった。

授業科目名【 フィジカルアセスメント技術演習 】

- ・ 後期「対面」2 日/週、「遠隔」3 日/週の体制で授業が行われた今年度、1 年次生 101 名(1 年次生 98 名+再履修者 3 名)を対象に、COVID-19 感染拡大防止策を講じつつ、3 密を避けての「対面」授業を実施した。
- ・ 本授業は「技術演習」を中心とする科目であるため、全体講義の時間以外は、クラスを 2~4 分割し、看護学実習室・準備室の各室に分散して技術演習を行った。また、クラスの半数は大講義室に残し、課題学習に取り組む時間として授業を構成した。
- ・ 技術演習は、1 コマ (100 分) ずつの交替制をとり、看護学実習室に入室する学生数を制限しつつ「対面」での演習を展開した。通常であれば、学生間で役割(患者、看護者)を交替しながら技術演習を行うが、今年度は、原則、患者にはモデル人形を使用、学生間の接触を極力少なくした。
- ・ 通常の授業計画では、観察技術としてのバイタルサイン測定技術、呼吸・循環器系、消化器系、感覚器・神経系、筋・骨格系のフィジカルアセスメントに必要な身体診査技術の順に演習を進めるが、今年度については、COVID-19 感染拡大による学内 BCP レベル引き上げに伴う「学内入構禁止」措置への懸念から、昨年度に倣い、バイタルサイン測定技術の習得を最優先と考え、自主練習も含めた時間確保に努めた。しかし、週 2 日の「対面」授業日に 100 名を超える学生に看護の基本技術を確実に習得させることは容易ではなかった。
- ・ COVID-19 感染拡大防止策の徹底を図りながら学生個々の技術習得に向けた支援・指導を行う目的でクラスを 2~4 分割し、26~28 名の少人数グループを編成して技術演習を行った。グループ毎に自主練習時間・場所を確保し、使用物品の準備・片付け時の消毒、教員の指導時間の確保・調整など、例年以上にきめ細かな練習環境の整備・調整に努めた。しかし、自主練習の回数は例年の 1/3 程度にとどまっていた。結果として、「バイタルサイン測定技術」実技本試験実施後の印象も、学生の技術習熟度・到達度の低さが気になった。
- ・ コロナ禍でやむを得なかったとはいえ、前述のような準備状況で実技本試験を実施した結果、本試受験者 99 名中合格者は 34 名(34.3%)で、例年を大きく下回った昨年度(105 名中 57 名(54.3%))をも下回る内容であった。本試当日を発熱で欠席した追試験対象者も 1 名いた。不合格となった 66 名と合わせ、総員 67 名の

実技再試験を行うこととなった。

- ・本試受験までがそうであったように、対面授業は週2日のみ、限られた曜日、限られた時間、限られた場所と、様々な制約がある中での再試験該当学生の自主練習日の確保は難しかった。約1か月後に再試験を実施したが、その結果は、追試験対象者と本試不合格者の計2名が当日病欠により「不合格」となった。最終的に、再試受験者65名のうち44名は「合格」、残り21名は「不合格」であった（※不合格者数は昨年度(12名)の2倍）。いずれにせよ、今回「不合格」となった23名については、次年度臨地実習（基礎看護学実習Ⅱ）前のバイタルサイン測定技術の再指導が不可欠と考えている。

筆記試験のクラス平均は60点満点中44.5(43.0)点（最高59(55)点、最低24(25)点）で、実技では昨年度を下回ったが、筆記は昨年度をやや上回っていた。総合評価は筆記(65%)、実技(20%)、課題レポート(10%)及び学習貢献度(5%)で行った。総合評価のクラス平均は71.0点（最高89点、最低44点）、成績の内訳は、秀0名、優25名、良33名、可28名、不可15名であった。不可＝再試験該当者15名については筆記(100点満点)による再試験を実施、その結果、12名は再試験に合格して履修を修了、残り3名は不合格のため、次年度再履修となった。（※()内の数値は前年度）

授業科目名【 看護総合演習 】

- ・4年ゼミ生5名を対象に、後期「看護総合実習（看護管理）」に向けて、通年にわたり、遠隔および対面でのゼミナールを実施した。
- ・ゼミナールでは、8月末に予定した「看護総合実習（看護管理）」に必要な課題学習を中心に、「看護管理」に関わる3テーマ{医療安全管理、感染管理、地域包括ケア（地域医療支援－入退院支援－退院調整－）}を取り上げ、テーマ毎に学生のプレゼンテーション（資料提示、口頭発表）を基にグループディスカッションを展開し、学びの共有を図っていった。
- ・4年間の学びの集大成と位置づけた「看護総合実習（看護管理）」の実施に向けては、実習の企画・実施・評価に至る一連のプロセスは、全て学生の主体的な取り組みによって整備される。この間、教員はファシリテーターとしての役割を担い、適時、助言・指導を行いながらゼミを進める。但し、今年度については、4月末時点で学生1名がメンタル不調・安静療養の必要からゼミを長期離脱、また、前期途中（7月末）より保健師課程辞退の学生1名が新規にゼミに加わるなど、異例の事態となった。そうした中、当初からのゼミ生4名だけが予定した課題学習に地道に取り組み、その成果を実習の目的・目標へとつなげていくこととなった。
- ・コロナ感染拡大に伴う病院内BCPレベルの上昇により、当初予定した8月の臨地実習は、実習受け入れ先病院の「実習停止」の措置により、昨年度に引き続き、実現不可能となった。看護総合実習(看護管理)のゼミ運営自体が危ぶまれる難しい状況であった。ただ、昨年の輸は踏むまいとの強い思いから、早々に近隣病院の看護部に直かに相談し、臨地実習可能な施設を探索した結果、準備した3テーマのうちの2つ(感染管理、地域包括ケア(地域医療支援)体制)については臨地での実習が可能となった。
- ・「感染管理」については、昨年度も遠隔での講演にご協力いただいた感染管理認定看護師資格を有する現役看護管理者(看護副部長)が所属するK病院協力のもと、「COVID-19禍中における病院での感染管理の実際」について、臨地実習を通して体験的に学ばせていただくことができた。
- ・「地域包括ケア(地域医療支援)体制」についても、本学看護キャリア支援センター「セカンドレベル」の講師を務めておられるH病院看護部長に相談し、H病院協力のもと、今回初めての試みではあったが、地域に根ざした地域密着型中堅病院での地域包括ケア(地域医療支援)体制の全体像－入退院支援・退院調整・訪問看護の実際－に至る一連のプロセスを学ぶ機会を得ることができた。学生にとっては、ここでの体験は、大病院とは異なる視点での、根本的に患者ファーストの姿勢で臨む「地域包括ケア」の実際を学ぶよい機会であったと考えている。
- ・「医療安全管理」については、臨地での実習が難しかったため、学内実習として「看護管理者がみた医療安全管理」と題して看護キャリアセンター専任教員(元看護部長)に講義を依頼した。その後、KYT(危険予知トレーニング)を実施した。課題に「新人看護師が起こしやすい事故事例」のいくつかを取り上げ、グループ討議を通して、①各事例の事故原因・要因を明らかにする、②各事例について事故防止策を検討・考察するを目標に、字学内実習に取り組んだ。学生は、将来の自分にも起こり得る身近な問題と捉え、興味をもって積極的に課題に取り組んでいた。
- ・7月より本ゼミに途中参加した学生1名については、他のメンバーとの学習レディネスの違いや看護管理の実習に臨む学習の遅れを取り戻すことを目的に、実習までの期間、他4名とは別メニューの、教員主導での演習

を企画・実施し、実習に臨む段階で他のメンバーと実習の目的・目標を共有しやすいような準備が整えられるように配慮した。具体的には、看護キャリアセンター；看護管理者養成（ファーストレベル）の講義のうち、人材管理、質管理がテーマの4講義を聴講させていただき、看護管理の前提となる基礎知識の強化を図った。実際の実習場面では、他のメンバー同様に、学生間で検討・作成した実習の目的・目標を達成するために、皆と同じく必要な行動がとれていた。

- ・メンタル不調による途中離脱の学生1名については、本人都合により臨地実習に臨むことはできなかった。本実習は卒業要件でもあるため、最終的に、看護師国家試験受験終了後の2月、個人としての課題学習への取り組みを経て、補習実習としての学内実習を行い、当該科目の履修を修了とした。

当該科目の達成度評価については、①個人学習/課題レポート、②ゼミナール中の発言や口頭説明の適切さ、③演習全般を通しての学習貢献度(マインドセット、ゼミナールの参加状況・参加態度、個人学習への取り組み等)のそれぞれについて、社会人基礎力の3つの能力/12の能力要素を指標として10段階で評価し、総合評価としている。今年度、総合評価の平均は81.5点(最高90点、最低60点)で、成績の内訳は、秀2名、優2名、良1名、可1名で、2021年度ゼミ生全員が当該科目の履修を修了した。

学 会 に お け る 活 動

所属学会等の名称	役職名等 (任期)	加入時期
日本看護学教育学会		1998年7月～現在に至る
日本看護科学学会		1998年12月～現在に至る
九州看護理論研究会		1999年4月～現在に至る
日本看護診断学会		1999年6月～現在に至る
日本看護技術学会		2007年12月～現在に至る
日本看護倫理学会		2009年6月～現在に至る
日本がん看護学会		2009年12月～現在に至る
日本看護管理学会		2012年10月～現在に至る

2021年度 研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 特記事項なし				
(学術論文) 特記事項なし				
(翻訳) 特記事項なし				
(学会発表) 特記事項なし				

外部資金（科学研究費補助金等）導入状況（本学共同研究費を含む）			
(1) 共同研究			
研究題目	交付団体	研究者 ○代表者（）内は学外者	交付決定額 (単位：円)
特記事項なし			

外部資金（科学研究費補助金等）導入状況（本学共同研究費を含む）			
(2) 個人研究			
研究題目	交付団体	交付決定額 (単位：円)	備考
なし			

社会における活動等		
団体・委員会等の名称 (内 容)	役 職 名 等	任 期 期 間 等
・日本看護協会/福岡県看護協会	会員	2005年4月～現在に至る
・西南女学院大学認定看護師教育課程	認定看護師教育課程検討委員	2016年4月1日～現在に至る
・西南女学院大学認定看護管理者教育 課程ファーストレベル	「論理的思考による問題解決」講師(3時間)	2021年5月15日
	「資源管理Ⅰ(医療・看護情報の種類と特徴)講師(6時間)	2021年7月23日
・北九州市国民健康保険運営協議会	副会長	2012年2月～現在に至る 委嘱期間(継続)：2019年9月1日～ 2022年8月31日まで(3年間)
①北九州市委託業者審査委員会	審査委員	2021年7月2日(於；北九州市庁舎) 開催されず(資料郵送のみ)
②令和2年度第1回北九州市国民健康保険運営協議会		
③令和2年度第2回北九州市国民健康保険運営協議会		2022年2月4日(リモート会議)

【大学委員会】

● 2021. 4. 1～2022. 3. 31 看護学科入学試験委員

- ✓ 大学委員会のうち「入学試験会議」に属し、看護学科入試委員として、看護学科長とともに 2022 年度入学試験に関する事項（入学者選抜要項の検討、入学試験実施に関する事項、入学者選抜方法に関する事項、入学者の選抜に関する事項等）の審議に加わり、コロナ禍における入学試験の円滑な実施に向けて自身に課せられた業務・役割を COVID-19 感染拡大防止策にじゅうぶん配慮しつつ粛々と遂行した。
- ✓ 推薦入学試験（指定校推薦・公募推薦）の折、担当した業務・役割を支障なく遂行した。
- ✓ 一般入学試験（前期）の折、主任監督者としての業務・役割を支障なく遂行した。
- ✓ 一般入学試験（後期）の折、面接試験等、担当した業務・役割を支障なく遂行した。
- ✓ 助産別科一般入学試験に関して、依頼された業務・役割を支障なく遂行した。

● 2016. 4. 1～現在に至る 学び場プロジェクト委員

- ✓ 2016 年度より、旧 FD 研修企画委員会メンバー（5 名）のうち、上村眞生准教授（福祉学科）を中心に、教・職・学合同の全学的な取り組みとして、「学びの拠点づくり」として、主に看護学科、福祉学科の学生有志による自主活動グループ；STEP UP への支援を継続して行っている。
- ✓ 昨年度に引き続き、看護学科、福祉学科の新一年生を対象に、教務課との連携を図りながら、先輩学生による新 1 年生へのリモートによる「履修指導支援」を企画・実施した。今年度も多くの学生が参加しており、次年度もさらに充実した支援が行えるよう工夫していきたい。
- ✓ 教員集団としては、本学共同研究費の助成を受けた「社会人基礎力養成のための『意図的な Hidden Curriculum（潜在的カリキュラム）』構築に関する研究」に継続して取り組んでいる。

【学科役割】

- 2016 年度より、看護学科入学試験委員を継続して担当している。また、実習コーディネーター、2 年生アドバイザー責任者、認定看護師教育課程検討委員及び助産別科一般入学試験関連業務等、学科で与えられた業務・役割を支障なく遂行した。